

Handwritten Japanese text on a red vertical label, likely the title or author's name.

^ 13
3084
1



目 へ 13
3084
巻

昭和十年
六月二十四日
購求

叙

州 壽 しやう あたを あたを 権 けん 濱 はま 永 なが 王子 おうじ 路 ろ 考 かう が が 敏 みん 示 し 昌 ちやう

コツ こつ ホリ ほり の 駒 こま 下 した 弦 げん と と け け や や 藝 げい 子 こ が が 光 ひかり り り の の 燈 とう 籠 かご

髪 かみ 質 しつ 細 こま 身 み 札 さ か か 太 たい 刀 とう 胸 むね 高 たか 帯 おび 淺 あさ 黄 わう の の 大 だい 牙 が 一 いつ 時 とき

代 しろ 子 こ 生 な れ れ よ よ う う の の 上 かみ 下 しも と と 吾 われ 弟 あに 乃 なり 祝 いのち ひ ひ 著 ちやく 用 よう

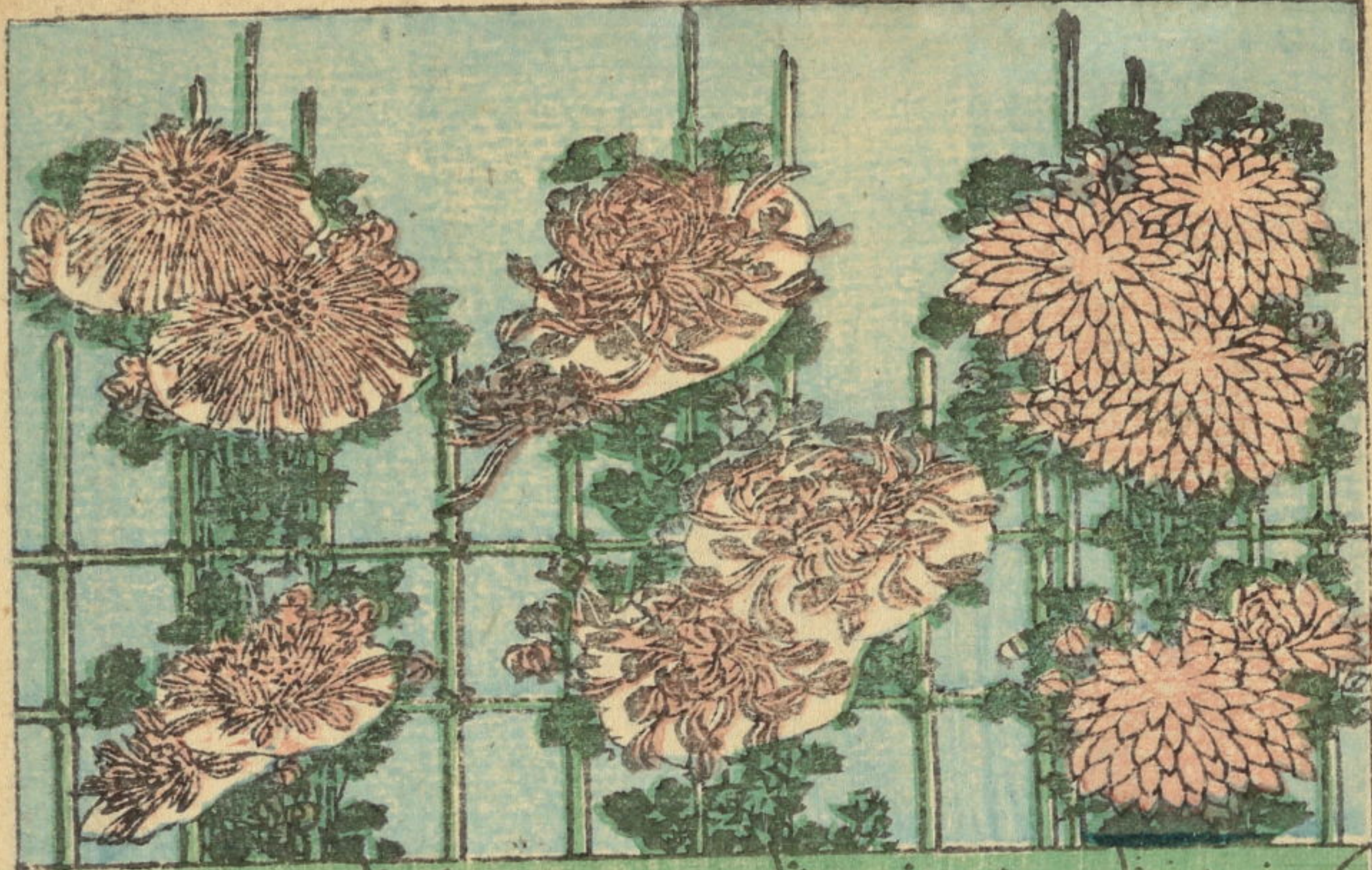
春 はる 信 のぶ が が 繪 え と と 愛 あい 玩 あそび 一 いつ 世 よ 森 もり の の 固 かた 子 こ 土 つち 平 へい が が 館 たんでん と

そ そ う う ち ち たる たる お お 手 て 下 した ち ち 時 とき 志 し 松 しょう だ だ 草 くさ 金 かね 々 々 先 せん 生 せい 栄 えい

花 はな の の 夢 ゆめ ま ま 醒 さめ ま ま 五 ご 十 じゅう 年 ねん と と 京 きやう 傳 でん 八 はち 翁 おう が

旧懐の文 予多々たるは後生もく實政に未
年 ぐや 赤本の漬 あらひ 女工 藤の咄 小
出れが常世が 柳は 春弱の 女姉妹 対面
はるめ 路三が 昨日と 今日は 絶
く 久しき 執業は 盗了と 見ゆる 世乃 流石お
これぬは 心の 用心し ても 口を 破く 梅王
此當に 芝居の 狂言を 大あせ 例え ちと
花は 蒼苔の 娘は 梅干 祖父は 悪口 あり されども

此方ハ 肩ぬ 糸で 力と 入る 用力の 大なり
九文龍と 水滸傳と 亦小 挿ふ ぶつ ちられ
目せ 足御代 小あは 松と 稻妻の おと 早
ぐら 十二 変化も 七役も 人形は ちが ませ 法
浮世の 川も あり 女中 奉る 辛 氣心 苦甚
愁歎 揚古いと 必ハ 新玉 乃其 春あ 子 梨人
花娘 地方の 肴の のあま 入組 せむ 好み
かゝる きたる せむ 禰舟 しく 重言 由り 言も



菊さげや

嵐雪

蝶々あはれ

繪比具四

菊のあは

野坡

菊見あはれ

むらひゆ

愚心骨が根本の繪双紙の形終る恥とるる友
 君子不見せぬ覺悟乃新取そのうれぬ損
 小やと高安の煙の書房より免子筆紙深
 京撰るハ粹書

お江戸での中本とよぶ

人情物作者金龍山下は草菴小

狂訓亭主人

為永春水誌



文亭主人

似よ
 そらぬ
 藝代
 心をこころ
 入てこ入
 大花子
 さそられよ
 月利

小舟
 團
 心



妻は憂と花よ
 こぼれてまよひの
 昔方のあゝあゝの
 山む
 八橋舎主人

か
 月
 秋
 佳

鎌倉
 雪の下

宝屋信兵衛が
 孫娘
 阿花

米町の
 宝屋の
 養男
 半七

宝屋信兵衛



支屋の
偽配人
助

ぬま
のり
人の
形

悪修験者

寂冥院



りて
きり
よ

打

鎌倉米町の豪家

阿婆
後家
満右衛門
宝屋

子をのりひ音ととが物ものやうようなるなる教しやう明めいあるあるののここのの男おとこ
多おほくののううららくくくく年としもも二に八はちのの角かくのの教しやう大だい家けの
若わか敷しきともともいいふふ風ふう俗じやくそのその名なをを守まもりりととよよびびおお着きととあ
たまたま二に對たいのの夫あつ婦ふををとと他たももううくくややむむ程ほどありありくく後こう妻さい
おお勝かつををよよううぬぬののああれれとと顔かほ色いろややささくくくく附つきき着きて
化け粧じやうををここののここのの由よし念ねん三さん十じゆ七しち八はち丈ぢやうああれれとと二に十じゆ八はち九きゆう丈ぢやうああれれ
満まん左さ門もんををたたくくくく家か内ないををおお解げ後ごままくくくくけけららままりり
倦あつたたくくびびりり多おほ実まこと子こををおお決けつ身みん代だいをを不ふ踏ふみゆゆむむり

おお菊きく中ちゆうのの別べつ家けをを守まもりり七しちのの落らく度どををあありりてて勤きんめめををままん
ととここのの家かハハ巨きゆう萬まんのの金きん銭せん藏ざうはは満まん地ぢ面めん
ななししきき八はち十じゆ余よをを所ところ持もちくく和わ田でん白はく田でん山さんをを始はじめ鎌かま倉くらのの法はふ
大だい名な方ほうへへ所ところ要ようをを達たつしし所ところ持もちののままにに頂ちやう戴たいしし教しやう昌ちやう
いいんんくくままりりけけれればばそそのの蔭かげおおままりりくく教しやう昌ちやうのの人ひとももあありり
中ちゆうままりり又また紀き人にん信しん去きょ傷きやうとといいくくるる宝ほう屋やのの白はく胤いんとといいれれ
人ひとももくく雪ゆきのの下したにに長なが服ふく履りをを用もちひひきき其その身みハハ六む十じゆ丈ぢやうあありり
ままりりくく十じゆにに才さいあるある孫まご娘むすめををままりりあありり毎まい年ねん京きやう大だい坂さかへへ

上下ろ一本店の用ひもなまなく流ふらう
けるがそ次ハ協助とらひて満右衛門とらひて同士
あつが二まめ目の支配人とらひて比企谷ふゆ道
具ハ見世を出しあれハ信を素よりの年里うく
能次郎とらひて十まめある時一入ありめはどく
の天家あればあはれ大造る押て知るべし亦代
もあつたその中ハ幸助とらひて彼信を清う上
京の早耶八瀬の里より親なりし子けしうそ表れ

あるとぞその由縁の者よりのひ清くハ女の財儀
倉へ運下りしがそ次ハ満右衛門夫婦のゆき子とら
ひのもあつた殊に幸助が生贖金のせうする義貞ハ
て殊に忠告し紀次郎由忠ら子けしうとらひて
はるを学ばせしがそ次ハ何れハ何れハ何れハ何れハ
もあつたぬやどとらひて十六才の財元服させし代
数ハ加へしより年束の者よりのたるる増り下度
出入の所を安方所用とらひてその財儀役人

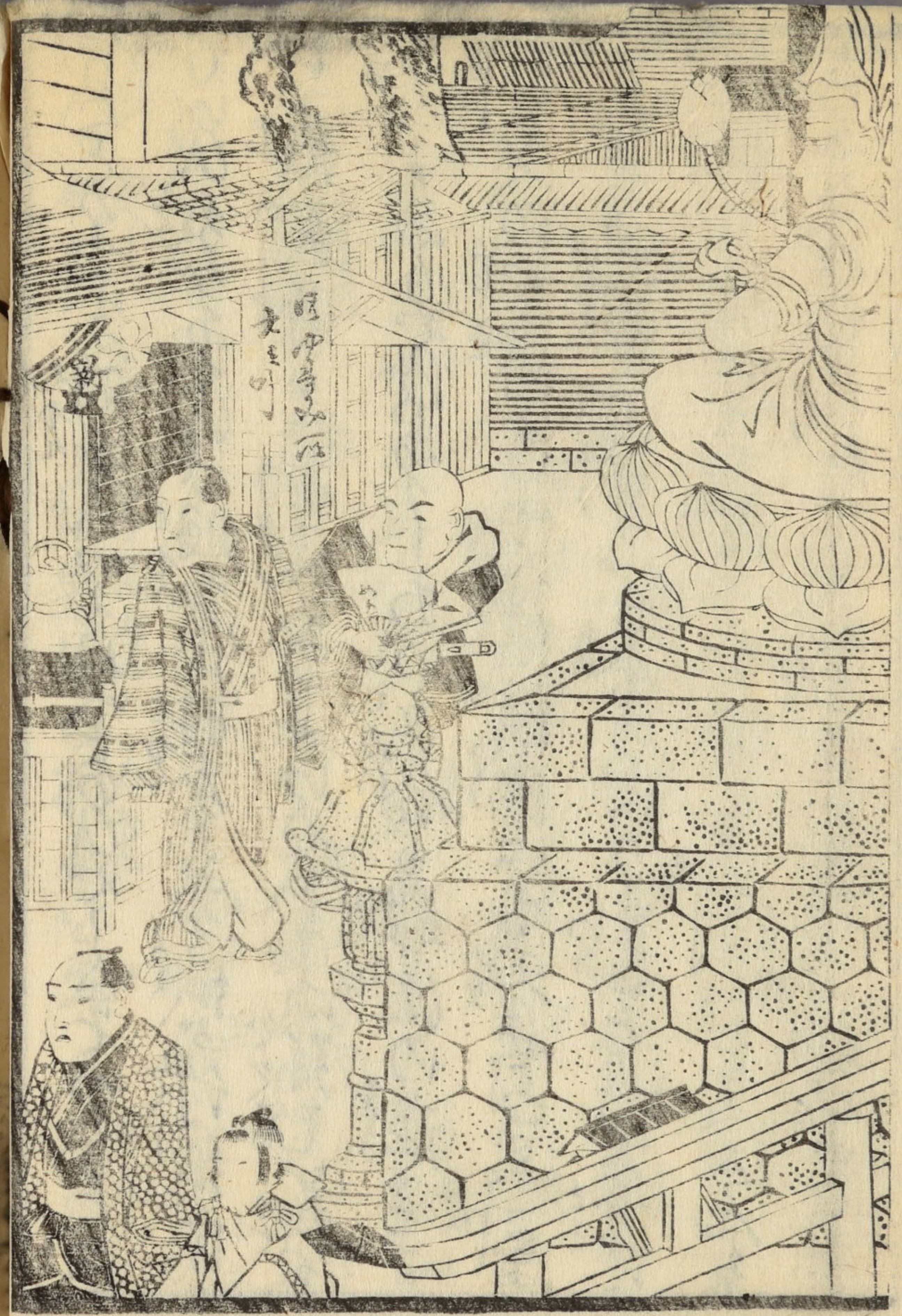
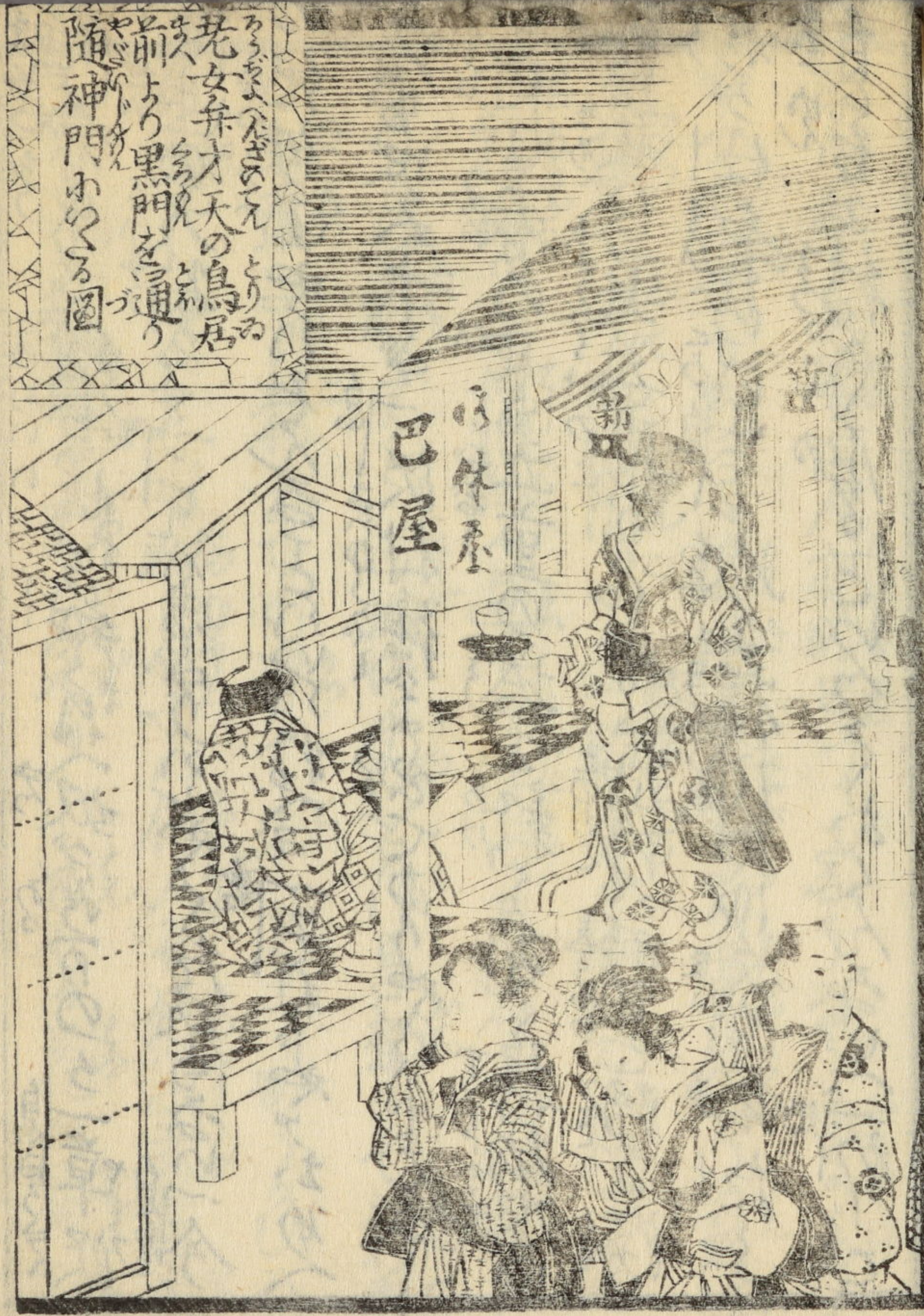
血衣のまゝよりひかひろく一尺は内用の糸あどつゆ
く静か末の女中が見惚て気どろく一京役の
色男されどもはくしとほく内外の人へ下り
おく高ぶるびつりく目下とあつれむと親の
子とぞるるぶとくされは満右門ハ後々まき用
ひけりこれいさそあは長谷寺の親世音とつえ
ハ鎌倉第一の教皇華よりく三國を及の西平場亭
そも境内の権ひひ拙き筆よ述ぐく千日糸

の鉦の音ハ念佛堂のそよふふおとあつてそよまの
群集光の赫く雷門ありあん橋の挑灯ま中にあつて
て陰陽の仁王修復ありく山門の額あり数百
軒はまほび店西側は連あれは只一軒の繪草紙錦
繪東側は麗々たるハ本心結七か安吉買りひも
春の下句人の心も海ありあつて下向の押あの中
小年 齡十八九才の息子株せんありとく色白く
いひまの花あり姿ののひまうそりと落付あつて

そのふりまゝにトふとりの娘をばあにたの
文亭さんとすゑ糸さんハ宮戸川先刻山の旁へ三人
連るお出あふまゝに一たてナ宮戸川のお狭が所中を
とるまゝに今宮戸川へ一寸身を出たと隣り
柳の邊の見世まゝ三人居てお出あふまゝに
糸の酒客の居るうらさ。とんと石原永遠田輪依
とりののがとりまゝに子松をると田輪依との酒狂
人ガ竹紙へお傷寒論の羽本を写すくを煙

買のとりの羽本ハつねとりのひやととふまゝに向
ていひながらい子羽本ハ羽本ガ紙ガ竹紙ガ
ら教医降るハ奇妙ゴツサのあふまゝに
糸ありやにまゝにあのみ合も難治の症
おめ人のい癖よハ大柴胡湯でも天をせま
しく大黃川草と糸糸のらりよ天をせま
けらた庭でめりまゝに
色々る人を見知らくお出あふまゝに

老女弁才天の鳥居
 前より黒門を通り
 随神門のくる園



こそも家督と由つる者よあはれ第一世七の世に
なごりてあるく出入も無用とありあはれ皆女房
お猿が作累偽助か悪公のおまを所よりして
か出生せしより満左門が心奴兼よかりの惣所
いひ秘蔵娘のお菊があともいせれ果然は屋
錦（よする候ろく）同日信由せば殊よそのお菊
の亭主は定めし一せ七とつらうのあともい
せしあはれとるり一人の信を流しかとと来られ

夫よりせしとかくまひとむすそふを助をゆよせ
て中へはあつ時奉家のありあはれ七とつらうの
お菊の事合点のね取奉のそあはれは内外とも
お菊を閉く室屋の家名と世間と彼先いられぬ
やうに用心し兼よ漸ぬあはれとあはれは兼よ
られよ我木ハあはれく出入を止りお猿よの亦偽
助木が始終と何ん第一お菊よあはれのおや
日々の中も使とをせよ女不口とたがひ用事とた

此不自由のるん中うふ下々の身代子に酒一うふ
らむ多藤思あわべうは室屋の敷於大幸の所
るればお後どのや協助あとの鼻とひくお
菊さぬよ威とけく並か肝要なりと流石大家に
ち配人未然とさせ一一言は幸助の感心
是非を始終のせ七と幸家へ引取元の上と若旦那
おとまりは急ぐか菊と支妣よりえんと云合せておゆるる

第二回

斯て信を傷いあぶうく幸家へ立入けり一が満右王
門いおづ死親の代より年久し配入無倉中へ
知られする別家奴のことに幸家へ出入るるせしめ
のあひりくものさりとおれ信を傷とぬまのさるを
るまこと申合せ以おぬみかきりびるけりあつと満
右門いづづの五六日おひく果敢なくゆこの世とさ
しうがあやし死より下り一か菊が怒き大なるるま
泣けしうを根よおぬるいとわき世の盛衰お後い

後家の結髪も艶ある花の落枕様表向と悲
しげふえせく笑ふ一入笑りり三番目のう死
偽助と契りたぐひまたくむ得る勝る日柄をえ
があましきへお菊と再おひきりく宿下りさへせの
せむせそれるのけりお捨置は信を清いせ七の伝言
しとお菊と支ぬるさんとせれど元來偽助の内
お終る系子然次郎とお菊と支婦と云一草家
を押領はる段られは後家の信を清とらるる

思ひ且神の送云るればせ七のの思ひゆよくばお菊
の境より舞をこれとの云渡ありとて取合は只何
事も送云々と死人お口を澄据とりひ立ま後自
在の金所將軍随ひるむくを中ま下知とせむくお
わらぬども満右内門の死期は自筆の送杖二通り年
若るれと支死人と云渡されし時代の幸助男がよくて
能がよき見まて聖取貝の情知り身と信て法人を
衣む新届を船内におろる出入の職人物の若れ思ひく

までももくろくありぬ其のうら子狸非の白の信を湯が石
印せし後立後家も偽助も是の底ま味つる
く思ふこそ実宝屋の杖柱と他も偽よあつて一がめぐる
月日のいとをやく満右門の一周忌とありて六が菊を
父の墓ありと預ひ今日久きゆく米町の象家へ
歸るそのゆ莊餘赤の象物に象とまき浴より附
添一乳母と下女とが左右に随ひ百万石の奥小柱と
いふねとあつて出立いまもあつてまてようつくく大振袖の

此より金糸の菊の無徳摸指童仕立比下髪ハ小町お
たぬ娘の府政近所手前へ失礼なりと怒りより出て木戸
際より歩ゆと連れり伽羅の香の偽ふ軒端や路次
に多く欠出しと見る人立よか菊ハいとあもろく老い
で家内へ入りけれとむりよあつるその風情偽助がむ
時ぬる子代ハ難と附く退出しぬハ後母か猿がえり
ひありろくぬる中よあつる時よあつる彼幸助
ハ今もあつて昔よあつる忠信よく兼くハ信を湯が内

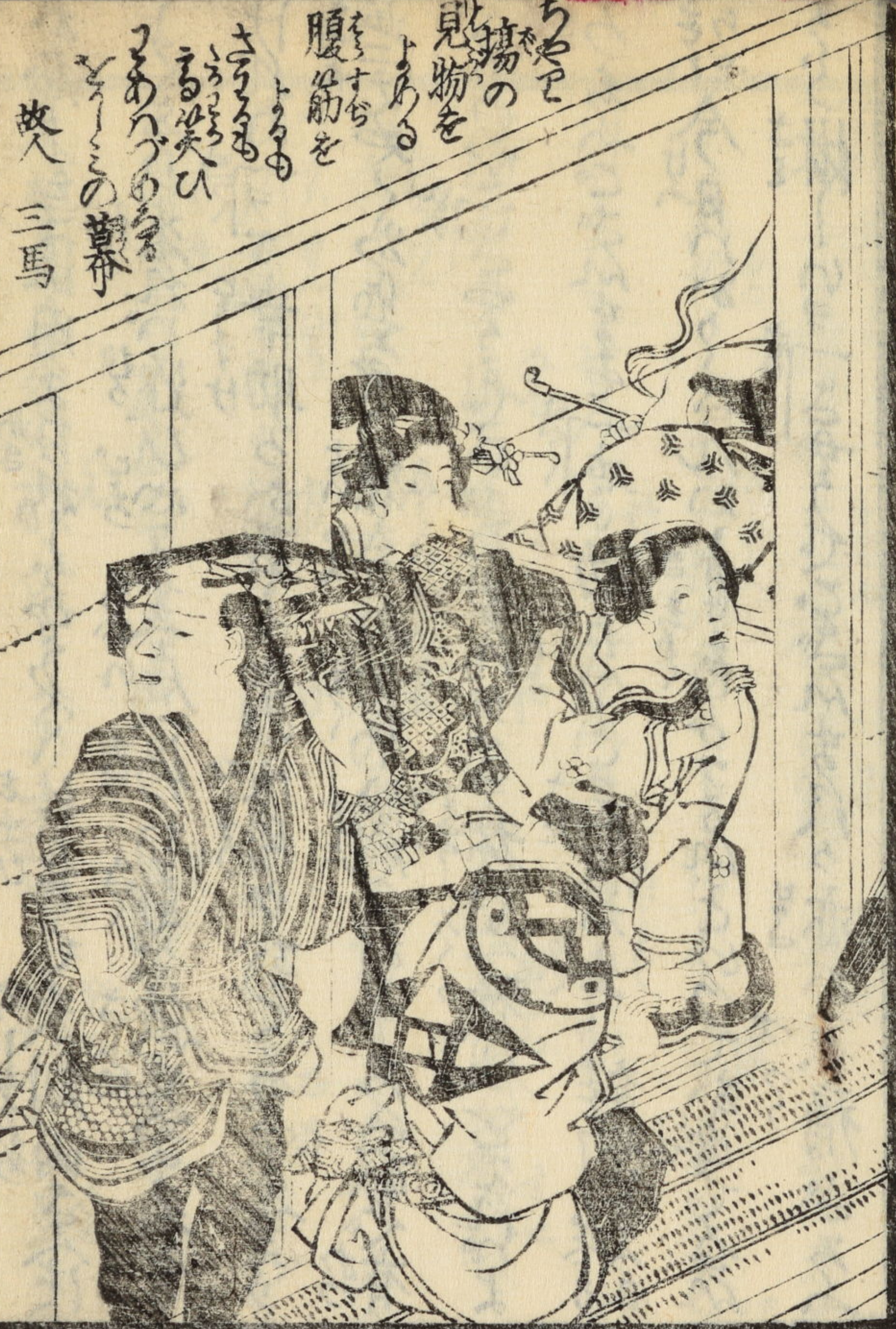
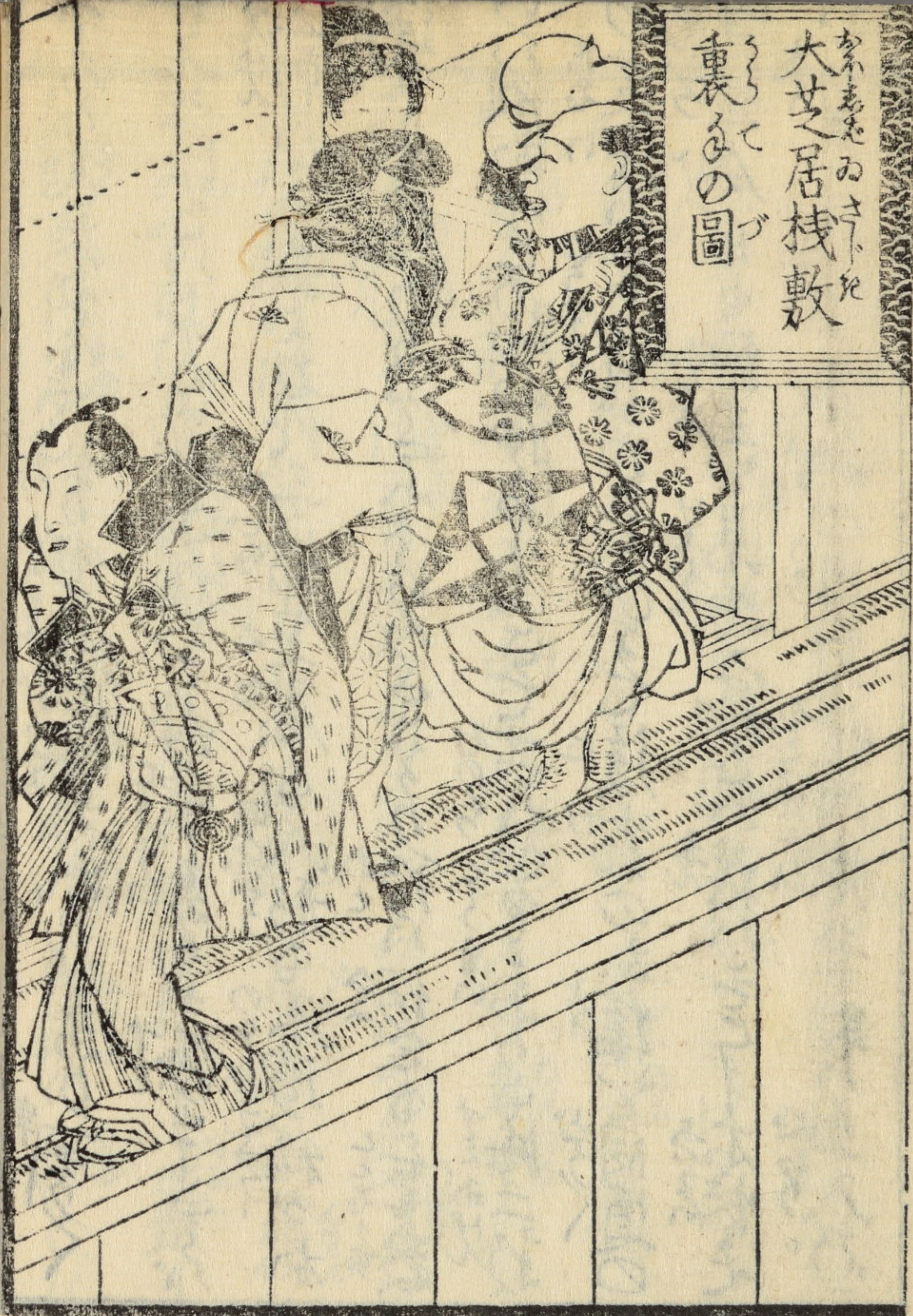
い つけ びぐ さい せう
意せと承常々大切なるお菊が宿下りあれは親
よりゆりゆり系町噺又世話と一なるがお菊も乳母のよう
らひうと幸助へ別てのろくをせしみやげの別家
出店(を物まぐ)比皆それくの送り物実の大家の宿下
下後る世帯此一年ハ此宿下の雑費取るといふ取巻やも
ありぬべし後家や出店の人々へ一礼漸々お菊が部屋
幸助ハ身とけうえれ義と述べればお菊も舎次一幸助
う練よお久しい今度ハ赤色も世話よりまたトりの

口上も二つおびで望い盛衰の興衰お不このあふと考えん
と一とつらつらする程うつくしき一練よモウ久きでぬき
けんをうらむひまう一ホニミア大造成成人抱合さうウ
お乳母とん他取るとぞお目よゆるとお菊さんとハ知
れまんと存まぬそれよ附ても市面親がせめくお一人
お出るそれとさそお悦びさりのウ一ささうサ身大の
まうくおるりあそむこと。まアちとんと立ておんせ持を
うとんと一いあごがるんのおはづらうのことがあるまのよ

のうれ幼年時ハ幸助さんの懐へたびくお這入拵おわりのあそ
ごね幸助さん幸初んちいさは少躰こるお子こごッけそのうへ出ご
病身びやうしんで先せんのれあんをさうぶさめぐ由ごくろふ苦勞拵くろうばばと
此このあひまるまたま救命きうめい丸がんの虫ちゅうのお菜なごのとねんちゆう年中ねんちゆうかままり
たうりたうり石上いしかみの流なが育そだわわそそたたのでああさんさんままアアととれれく
此この癩瘡れいそうの時ときハかままが七日ななの塩しほ断たで弁べん天てんささぬぬ預よかかけ
ふあふあむむおおびびくく此この代しろ系けいととるるさされれッッけけねねエエトトとと越こへへ方かた
ととびびッッけけ思おもひひににををッッおお親おやのの啼なもも涙なみだのの種こぼとななり

かろりとあがたあがた下した系けい千ちああ喜き量りょうののおおひひありあり一いち毛もうくく
てんてんああととららううふふああととれれああおお寺てらととありありがが漸しん々ぜんととななるる
二に軒けんハハああよよたただだ子こ供ども芝し居い由よし人ひと形かたち由よし不ふ躰たれれががお
連れん中ちゆうままたた一いちありありががふふトトりりととささららりりぬぬれれ何なにもも云いふふ事こと
のらのらああががととのの四よりりししととてて甚しん後ご寺てらととありあり由よし海うみ二にお
のの芝し居いハハ幸き助すけががととううひひとと後ご家いえののおお様さまとと同どう道みちのの
見けん物ぶつ今いま自じ由ゆう効く三さんとと見けん物ぶつををれれととおお様さまハハままとと不ふ快かいとと
おお菊きくとと乳う母ぼととまま代しろのの内うち二に人ひと程ほど附つ添そ寺てら幸き助すけハハ出い入り乃なり

おんあまのさかた
大芝居棧敷
裏の図



ちかて
おんあまの
見物を
よめる
腹筋を
よめる
さうらも
いさかひ
こあひつのも
どろこの幕
故人 三馬

お忍一き(流用)はられ(か)の(か)うく(か)は(か)舞(か)て未(か)剣(か)雨(か)さ(か)は
よく(か)あり(か)来(か)れば(か)逆(か)ひ(か)心(か)は(か)芝(か)居(か)初(か)か(か)菊(か)が(か)枝(か)交(か)り(か)来(か)り
ければ(か)一(か)下(か)幸(か)助(か)り(か)お(か)忍(か)一(か)き(か)の(か)流(か)用(か)が(か)お(か)そ(か)ろ(か)う(か)人(か)モ(か)ウ
些(か)々(か)や(か)く(か)お(か)忍(か)る(か)う(か)然(か)今(か)の(か)暮(か)の(か)流(か)用(か)は(か)あ(か)り(か)あ(か)り(か)あ(か)り(か)有(か)
この(か)ど(か)の(か)母(か)う(か)で(か)ご(か)ん(か)ま(か)り(か)ナ(か)私(か)ハ(か)六(か)歌(か)仙(か)と(か)え(か)れ(か)が(か)よ
ろ(か)あ(か)ふ(か)ご(か)ん(か)ま(か)ま(か)一(か)幸(か)助(か)り(か)と(か)前(か)へ(か)お(か)出(か)ト(か)幸(か)助(か)と(か)ま(か)人(か)お
の(か)今(か)日(か)の(か)か(か)う(か)え(か)ハ(か)身(か)色(か)が(か)つ(か)る(か)ん(か)と(か)い(か)う(か)そ(か)お(か)出(か)で(か)る(か)ん
う(か)ら(か)淋(か)しい(か)ヨ(か)一(か)と(か)母(か)う(か)で(か)ご(か)ん(か)ま(か)り(か)亦(か)お(か)忍(か)痛(か)ご(か)ろ(か)ふ

お二日(か)續(か)けて(か)芝(か)居(か)と(か)後(か)で(か)逆(か)上(か)ると(か)あ(か)り(か)あ(か)り(か)あ(か)り(か)あ(か)り(か)
う(か)ら(か)あ(か)ゆ(か)う(か)う(か)お(か)出(か)拵(か)せ(か)と(か)し(か)と(か)け(か)れ(か)と(か)一(か)あ(か)あ(か)え(か)お(か)忍(か)痛
は(か)る(か)ご(か)り(か)ま(か)せん(か)う(か)一(か)の(か)エ(か)た(か)ん(か)の(か)身(か)色(か)の(か)つ(か)る(か)ん(か)の(か)芝(か)居
へ(か)あ(か)り(か)と(か)あ(か)り(か)の(か)身(か)色(か)の(か)つ(か)る(か)ん(か)の(か)芝(か)居(か)が(か)お(か)好(か)で(か)ナ(か)セ
お(か)忍(か)言(か)の(か)と(か)見(か)自(か)井(か)拵(か)八(か)の(か)役(か)と(か)あ(か)り(か)や(か)ど(か)と(か)あ(か)り(か)あ(か)り(か)あ(か)り(か)
西(か)川(か)扇(か)が(か)振(か)と(か)お(か)附(か)ナ(か)ス(か)と(か)い(か)の(か)よ(か)出(か)来(か)る(か)ん(か)と(か)激
お(か)忍(か)木(か)で(か)お(か)出(か)わ(か)そ(か)を(か)ま(か)う(か)う(か)齒(か)が(か)あ(か)り(か)ご(か)ん(か)ま(か)り(か)ヨ(か)一(か)と(か)母(か)う(か)
久(か)か(か)菊(か)さ(か)ぬ(か)の(か)拵(か)ハ(か)う(か)ろ(か)う(か)の(か)よ(か)ナ(か)セ(か)拵(か)八(か)で(か)一(か)出(か)る(か)ん(か)を(か)は

け七おやんぬされバのトを多しるり守せ一中國筋よりなる
なると勝うんでもせんせぬ東路へあまぢ一ヲヤきく大和屋あまとやの縁えりより
似るね工のち法ちや屋やでおまひヨき一きおましてくおまえさんが
控えん八を控あづうはえ控えごろふとせんどごうらッイわる
たをまぬね似まこのご桑あ二でいごいません声色がお同
控あづう度うハゆ又と呼よぐ一吹か波たづせヲホニ芝居
はるの鈴す蝶てと呼ませうう桑あ二ハ余れうまくつら
ひまた飛それく桑あ二ハアノ三味線やの勝せんとら

いんが上にごそふご子ごまうられ敷で鳴が有まり
たッけ一子まうらく桑二ハ関二由美声をひまり一
清よ元の淨うりみんさア右美入のかるより終くらぬ
でごごんまらんが年中酒が好む粹客よならりあらう
く居ままと吐一の中はあらせの拍子木音く一ヲヤ
昔あ昔あめまらんそふご一十二まご知らせらごんまらトの折を
く飛屋の亭主天地金の女子扇を持たり一ハイお嬢
さん先刻さふあらうあらうのをせくかせまく一お嬢のハ

とまき 土波輪町の 宛中も扇がはんで有まらる中へ倍れ
でいらちのせんトのてをか菊ハまは清くあつて笑ひ
ありぐふト用く扇と喜助ハ續下一の蟬もや木
げふ眠る木綿賣の芝翫ハ美事なる自れでお
まはね一かまのまよ似てするヨナニ私よりのさうよ
ごいふまはごは他ご不が扇をさうさう出さうまの
でも隙くやらねへトヤアおくれさへいません
うとらやら喜助えんがあら人か出の時ハさる評判

あざむきころみ成駒を子紀伊屋やと一ツまは好漢が
末ごといツくお末の女中が泣く七日ばうがひま
可のや風の神とる遠くのがごいませう一いつまは
もオホトトリのうき舞臺ハ狂言あつた役正面
をつげが頭取上下あぐ上あ居て東西々々
いごごりまされども後者の美ふごりまされば免
かふひりましてこれより中上まはははをんトの
ら美能仙女香の儀はおきこの成敷とのあま

作爲地ハヤスノ下ノ浦京大坂諸國在之浦々々々
こしやうち
 おひさま ごはるをえ
 おひさまの流輝判り下されまゐる股有が死仕合子元
おひさま
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
 トそまろのまゐる後赤いろの約道より銀座三丁目東
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
 側角(開店)のつゞくは某念入調制衣仕のままを趣
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
 くらふ由風聴中上まゐる随より尚其居所をのさの
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
 此其蔭とわきまをてるがごとく大人大敷を昌つるまゐるの流
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
 座元頭取お熱意申いゑるゝ大慶至極みゑん下たて
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
 まろ下まゐる右お礼とて未孰の私を淨るる長唄取
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ

合の所作事おめまゐるふのせられまゐるこれと取
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
 立と思ふ此志と尋らぬ見物の役偏にねのひ上をまの
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
 今まゐる則名題ハ重陽嘉言翁草二冊めたりませ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
ごはるをえ
 さをり千ヨシメ
ごはるをえ
ごはるをえ

翁草 一の巻了

重勝 應喜名久舎 二の巻



江戸 狂訓亭主人補綴

第三回

且説雪の下さてゆきある信玄まね流ハ老年とくしよりなれど杜健まじやうやく本家もとけの
いふまゝうまい家内かみうちの上下うへしたとあられきてものもの信切しんせつりし
あひの外ほかる本店ほんてんの成妙なりたう満右門まんごもん病死びやうじのあつハせ七なな花はな
言ことどころところていふく寺てらありとく宿下しゆくげせしまじ菊きくも家内かみうちの振ふる
合あひあひあひらうらうねハ一生いっせい育そだ公こうとまらるまらるどくひひくく屋敷やしきへへ後ご

家の我儀増さし偽助が私欲の下心幸助一人が柱同
前今の分るる後々心元平一そのは七の他言はれぬ
別は店とて入りか菊と夫婦まる一其が本家のこりなり
と京前の店へ堂り移せば七の系隠居所は何一つ不自由
らぬやうな海うるひか流し正月のたるとして面は後公門社者
娘子供の追羽根も花やぐ春の京物とくさるめきり
服まゆもろ水の車井も淋し立音と系をりあり一
下回

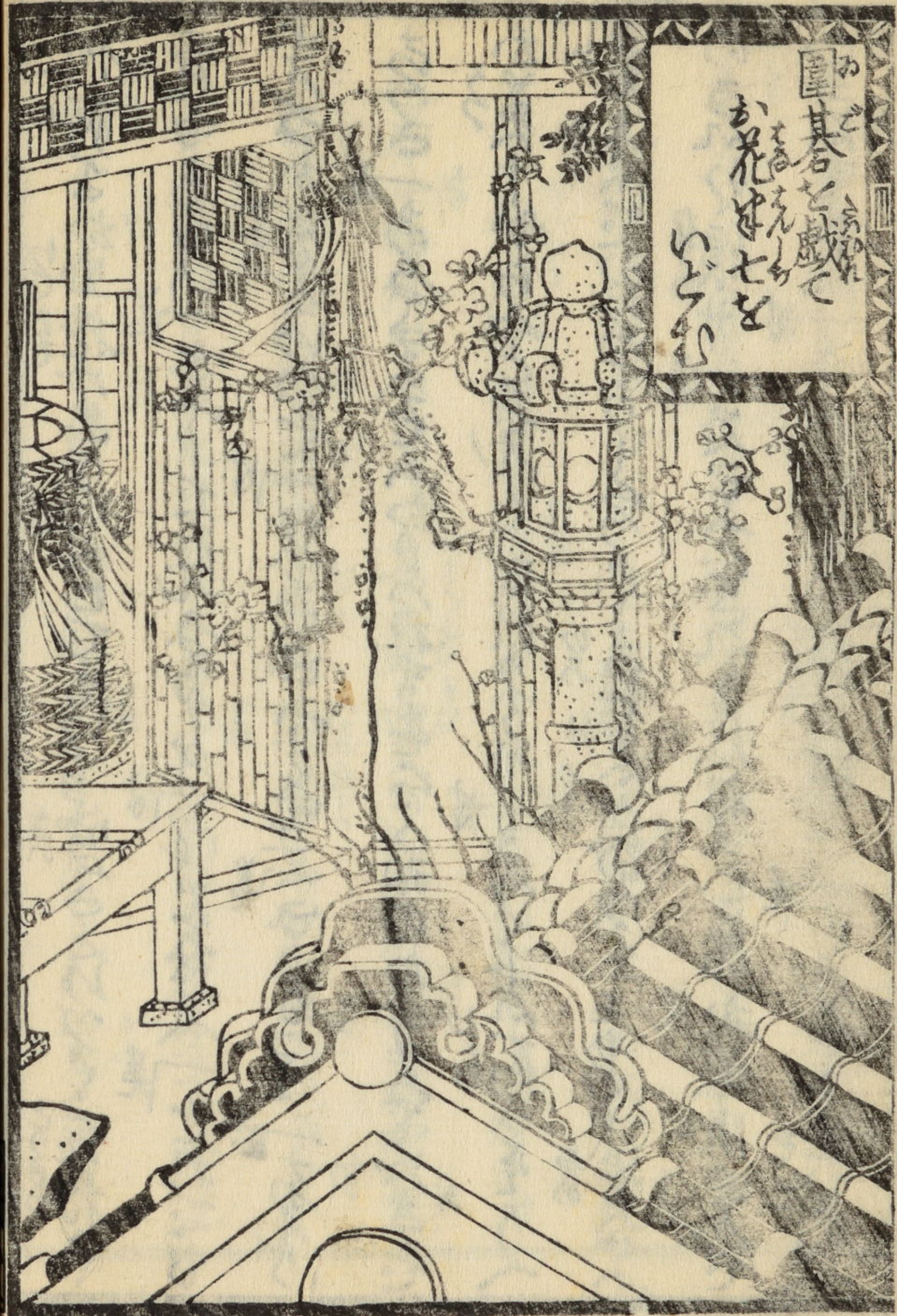
は七があつたあたり多々系務がん傍の本単子より本
まをいたして居る所へ彼信玄湯が孫は家の秘
娘お花花の色うらうらくと本家の娘中のまきり年十六
たえられとも少一成人ふんえ一人子のおとこのれが
ふ生立と自あるなむの者今日八時文化粧由一隠目
春小袖池添の加茂川は梅の小枝の花袋振の袂
子下女の前茶をもちきたる一若旦那さ由一
子

用があるうへに今本迄十本杖の二編を取込み
道まで一所はいふ一お嬢さへはよきかあまを
かうち抱げせとりひら母をへりて死すく跡申さ二人
向ひ一ふらしてませうなま一ふらしてあくらふけ石を
園内そちちとせお嬢一抱かきまじまじ一ふらして
いまるいづこでも叶はぬ石ごころまづうらして運のサト
く一運下心生う殺しうおまんの戦ひ一こそ私のあ
まよき一てあひらひしこのごころまけるの知れ居り

まま一と入るとよふはとんごか上らぬと大々外よと一へてが
のまらふ一と一うそをうらな店の幸助とおま
とまらふ一和合ごとくさくさく由めいさくさく幸助あま
私の九目でもうまの娘の名人よまをぬれるのを一と
幸助さんといふはもうさうさう一とさういふはませんを
一それでもさんごさ幸助とおま人と申がうらとらあま
モウあくらふらよくお嬢一抱かきまじまじ一ふらして
とも私の幸助さんいさくさく一とさういふはませんを

か上りあが一あるあるこそ今いま本ほん店たなへか帰かへり花はなびとと菊きくえ
と中ちゆう夫ふぬぬふありあり花はなびのぐぐこそかかののここででああららままま
ららああららわわんんままががくくくくよよららむむハハ花はなののササ一それそれハハ花はな
咲さききええハハ心こころ中ちゆうととかかそそ花はなびのててううエエ一それそれハハむむりりののここととサ
一ううそそやや一わわんんここよよハハモモウウ女によう弟てい買かひゆゆりりややかか菊きくゆゆりりやや是これ
うううう上かみ方かたへへりりつつてて花はなびのああはははは隠いん居きああややとと一るるををエエ一ハ
ゆゆみみ女にようとと女によう房ぼうよよののたたれれぬぬりりササ一かか菊きくええををううエエ一ハ
みみ子こ供ごをを見みるるままるるののハハららやや一そそううててかかりりハハ方かたととののハハ

何どこ所ところももかか出い出でたたががままままエエ一ななむむじじののヨよゆゆててととららくく花はな持もちく
れれももああゆゆひひ一ごごぶぶ一ととそそんんままるるがが一ッッハハまままま入い一それそれででも
ととんんるるかか方かたららりりららそそ一ららららそそごごぶぶ一ハハごごぶぶゆゆ子こエエ一ああんんの
ああらら一ああるるままよよそそふふああらられれまませせららおおののああ方かたららるるままままをを
かかいい美み一かかららゆゆととととんんトトままぬぬりりササ一ううううくく一ハハああららるるままままををうう
ままままままででああららるるららくく色いろ葉はががああららくくモモウウハハくく一ああららるるまままま
ののああららるる娘むすめササ一ええままよよごごぶぶんんままぬぬねねエエごごののかか娘むすめははさんさんで
ごごぶぶんんままままエエ一ととららととううのの箱はこ入い娘むすめササ一そそんんるる其その宅たくへ



知身ふか出花づりまうし「さあめめいさでも先でらやど
と井一うそをとり「そんなのは先中終男のひらき
つあると井一それでいさうまじいまたね上あるふさそう
かひのれろお方ハ「ああああああああそれ程ださ
へ見せるうらぎりかいでまいたひらがる試験より
鏡とそらと出「今さういふ余まはて居る娘をさ
るうう「エトのう後よりお花を考ううらぎり鏡を白
ふ向けそれよくか見「よくせふえんをうらトはあひりど

嫉し「ええぞとまる程牙ふあさ「お不に娘の物さよ恋
のうさの好漢「幸助の男めふふめううう人ごん
あひいら「娘と夫ぬふあるうらトつれくお花を
涙ぐむそむくす七つあふふああ「物より死ねやど
惚ておるとあれと本店の舞とさたなる人ゆゑあま
らめて居る「ふ今思ひげりく云出「情をらすの
せふえん小嬢「まかのおとくとあふとあふ「さううらむ
く 作者のいりくるるあをさると やありく「よくうらくさ嘘

耳かどろりま猫ねこの恋こひ一一アウリアウリあやアアアアアアトトは
七七の方かたへ飛退とびのまきさりまがる時とき小こ傍そばがが一一お嬢お嬢さるす
いつッいつあやんあやんととアアイイ。ママモウモウあれッあれんん若わ且且邪よこしまえん
後のちふ今の敵かたみととりまのヨヨ今こんど度どいついつここううが勝かちるるッ
ていていまませんせんわわががええそそかか出いたたつつせせトトいいひひ約まじららてて出いる
約ちか條あ子こううりりはは七七ががどどろろむむたたららくく撮えん例ぐへへいいどどるる軒のた端た
小こ風かぜ鈴れいの目め前まへへへちちううつつ短たん冊さくいたたるる等とるるららああささああふ
題だい 云い初はつとと後のち増ます哀い

いひそあーいひそあああらられれああいいののああおおのの藍あゐよよののももああささととああんん
ああふふ乃のままささ
ハハテテナナアア今いまままどどままままぐぐつつななんんどどトトををううるるななまま南なん枝しの梅うめ
花はなのの女に舎やととるるふふつつ日ひ亦またよよひひ出いたたかか花はながが傍そばままよよひひそそああててハ
我われああががらら野や暮かりり死し體たいととくくとと一一間まよよ入いるるやや入い相あひとと
ああままぐぐささむむきき春はるのの風かぜ急いそのの初はつ風かぜををととららびびーーおお花はながが心こころとと
つつるるううんん拙さく子しがが筆ふでよよららんんよよううのの情なさけととああれれるる人ひとをを知しららぬ

第四回

百年の夫ぬあり一世の情人絶てり古人もこれ
とくとりふもり姫氏國のやうきうぎし人の心くさるあ
らむとけく結ぶの神さぶらほひくさるも浮くさる
ぬの樂ももの家身を捨くみづくらさる味増す
も苦よせぬ情人の夫ぬありく二世と三世とくさる
かあるも浮せくす七いあがる縁一の哀夜思をす
ぬまし一お花が都な一お花さんまぶらむよかりで
ハイりろそさむうおんぬまを縁一さるうサくさるあ

火がわろく一アイトつろくさるりのしく居るそのぬ女の
中形縮緬の中衿小袖下着の袷の鈍菊の大がく
黒びろふどの帯紅ちりめんのゆりドあどけなくさる
そのよし七す七の敷をそろと覗き一チツトああたり抱
をくませ一ドレちろくとぬめんさるトお花の服へあたり
ながろくこの間うちろくおぬまをろり信切らぬ事
をぬくおろくさるがありやアなまろくならぬ子一あわろ
あそ一ナニ男が一旦口一ちろくさるおとま腔がぬあものろ

「それのうしろも同じおとサ」
「啞むらり」
「うそでも
おごおませんけれどもあるさあそお菊さんとの
羨しぬお方があつらふまゑぐ夫婦みたくしぬ
とりよぐ知まそくとまままはけもこと一そらちの夫婦
おあつぬままでもあつちの他のものを女房も持
まの髪一ホ真実一はまをホ迷惑たらふの
「他の男よるまるとまらみのヨトリひるぐらり」
「春の夜のめやも死あを恨まられやどる」

はぐるもののお夢ゆりの色の東雲よつられと
あき床のうへ「モウ夜かぬるごらふの」
おさんませう「おへい本店へあへんがかとまり
たうら考まぐくとおれさけれとモウおぬりごとつら
うらまて入居所へ行けれとゆるらだ志まると
まらね入「あつてこそトあゆみとまめく床
まのうらふおひやこのらんめて二人の
まらりそのあつて本店の縁ゆきまらなむひ

と乱れ落るる不^ふ了^{りょう}見^み他^たの知^ちらねと幸^{さい}助^{すけ}の如^{ごと}く
あけとびをゆくもささりくをのたぬか菊^{きく}の一生^{いっせい}
かうそ
あふふとのふの、一旦^{いっぺん}のひまづけせし人^{ひと}が他^たの娘^{むすめ}と
いろごと
色^{いろ}幸^{さい}と噂^{うわさ}がふもよるまどとか菊^{きく}か芝^{あそび}居^い見^み物^{もの}
の時^{とき}はせとよひはやれとも病^{びやう}きといひまろ芝^{あそび}居^い
へもあつて一向^{いっかう}本店^{ほんてん}のあともあまもまてまぬ風^{かぜ}
まろくののめく今日^{けふ}の腰^{こし}越^この料^{りょう}理^り茶^{ちや}や植^{うゑ}木^き
屋^やへあつるひ一向^{いっかう}めく一^{いっ}の若^{わかし}且^{かつ}那^なあま人^{ひと}さんへ

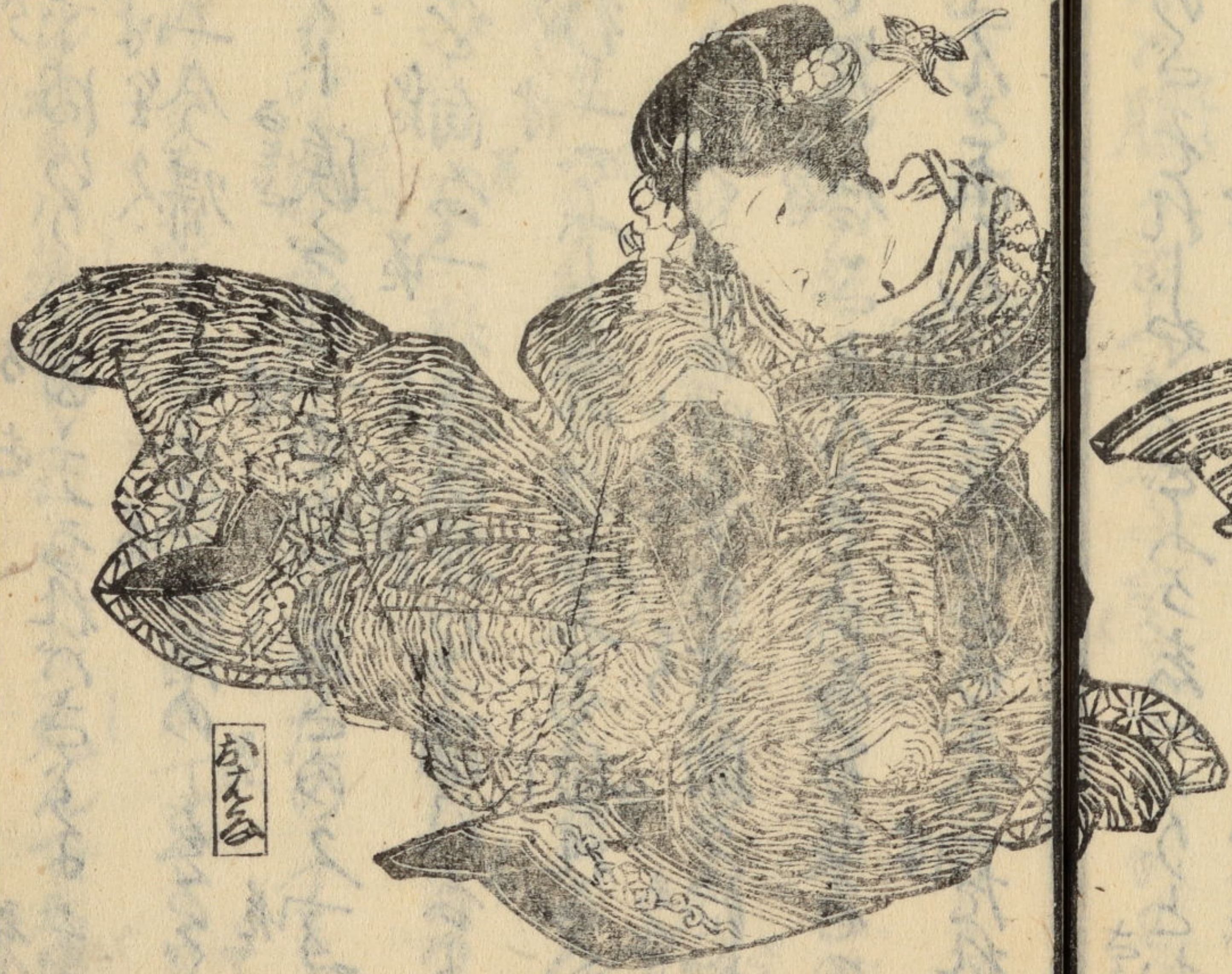
人の縁^{えん}切^{きり}をむふるさるね上^{かみ}一^{いっ}る世^よ上^{かみ}一^{いっ}る世^よあやぶるませ
か菊^{きく}さんち子供^{こども}心^{こころ}よか兄^{あにい}さんちさる人^{ひと}をばつとさ
あまホトるさるさる勘^{かん}三^{さん}の時^{とき}もあま人^{ひと}さんよ度^{あや}せ
とかのいばを病^{びやう}をづるさるお出^でもなり一^{いっ}の屋^や後^ごむす
やの時^{とき}もはくも既^{すで}痛^{いた}がまるさるんち出^でてさる
か花^{はな}さんと粉^{こな}列^{れつ}町^{まち}を中^{ちゆう}見^{けん}物^{ぶつ}ごとのふあごをたれんか
若^{わかし}いうちの色^{いろ}もあまもあつるさるつがちのつとあ菊^{きく}
さんの方^{かた}もあつてごらつとま一^{いっ}の屋^や後^ごむす

首の教訓しやうのきょうくんは中七のめんちゆうしちのめんト入りいり「いよあめ人の真実まことを
君きみの老ねらねへぐ突ぶつのあの身代みしろおのをさへね入いりヨ「お花
さんと夫婦あうふはるりのえうう子こ「あそこへる野暮やがどい
そんるうけトやア孫まごへけれどけども「まアくごの由よしもさうご
ねくガモリ買喰かひハあううさせ入いりあんまり男おとこがよすぎ
はううこまるトありううとろく異見いけんをまきさか
「まいぶんこれううたうむむがむ花はなもさう由よしもさう
がねくごふ此節このせうハ腹はらグごふうさうさうごううのこい

そふご「こまるのめごそれトやアごふうさううりさうとね
後ごせだハるりままをいん「あんよこまるヨイヤ此君このきみの
十兩じゆらうの玉たまらんも珠たまごよあうごトけ「あんのお礼れい
がりのりのりみんを不足ふそくがあるさうさうさうさう
さううあめさやいま「トのうく「吐なげ「あひ庭にわ
うう船ふねようちのりく「花水はなみづを「うう雪ゆきの下したの
家いへよ「ううさうく直ちか入いりまが小傷こけがハさあそく茶ちやを
りちあうお花はなハ柱はしらよのこまはんとしく後向うしろむか

かきかき
うきうき
痴情小迫る

實々よふ ぬ阿
かきかき
あこを人目の
ひまら



風流の聖主ばさこの
涙君子後まごふ恋
首衣の情莫
笑人道
の主意



半七

お親ハ今日も寺泊りの為、主るればさうよき
数由多死やうを今歸りまうと一おたのしきで
おどろきまうとさうと涙ぐむ一どよをよこの入
一そんならうあちうを向る一か構ひ拵げし
服の方へはおと初一どよ一このどろみア知れ
究よそのまうおはんくまる時分ど幸助が深切
おくとお云このゆい合ぶせんるうとあちもその
はものぞ一お菊さんとおえん礼と拵むの久一だれ

とんれを志すうといふぬお世活サ一そんなあとの
海せんおんまうでいふまを今まう何所においで
拵む一おまうが惚れくある幸助よりよくお終
儀とさうせられこのサ一うそあちうり大にお菊さんの
おあう工一さかうく一アアまアうれ一そあるお良のサ
そくや一おト美の袖をかこの様よおたのしきで
おさんませう一たのしきあうまあるさう一そよ
お私ハ末々捨られるハ知れくあるう死んでお

また下後向は終は身をに入れてあふんぐ居る一五んの
夫をあらちるりふ身も今日由幸助がおためあぐりの
見見と一いおめ人と縁をきりせる下におま人もまを
かうちはけよ突ぐまをもたぬねへ美理ごうだんく
兼まむくあて切れるかうふきるのこごよで此方の日記
の身幸助と身公人といひあめの内縁の者の清
はより男の並流を如方なく第一かま人の流あ親
由幸助をむおきふくくせひ解あまるとのたまご

それも系内兼る生れのおめ人がるんぞといふにはあぐや
ゆんでもろくよ返事とあね人のおかりを馬鹿よー
きりくわさくさあうーそれも志くごがねまごくおま
へのきりさうらいらぬ娘とまごーの内でも情人あま
さうのまを見このごとあきくめかうアてさうまいの
いの人まーい下とさるまき世苗を灰吹へたきあらうと
あ上るお花ハ裾を引こる人ーゆつとさうぐ兼まぐひ
かうるのさうさうさアサアそれをあきまを拵せトな

かゝの女は七ヶ無理のありては、^き夢くや、^さかゆらんき
娘も^あゑの^あ意^あ地^あ齒^あを^あらひ^あ志^あたる^あ恨^あ自^あ守^あ七^あの^あ不^あ
業^あづ^あく^あ一^あそ^あち^あう^あく^あ云^あ出^あさ^あね^あう^ああ^あけ^あ方^あく^あ不^あ業^あ
して^あき^あれ^あく^あや^あら^あの^あど^あト^あ突^あ倒^あ一^あ次^あの^あ間^あ立^あて^あ初^あめ^あ花
ハ^あ病^あの^あ積^あの^あ胸^あへ^あさ^あく^あを^あ及^あ返^あり^あ眼^あと^あひ^あき^あは^あけ^あ
その^あ指^あ子^あ守^あ七^あハ^あ夢^あく^あう^あく^あ抱^あか^あく^あ一^あど^あく^あく^あ
ト^あう^あら^あた^あへ^あ一^あが^あ香^あけ^あ直^あ一^あ茶^あ梳^あの^あ茶^あさ^ああ^あく^ああ^あ
一^あと^あ華^あは^あと^あは^あふ^ああ^あく^あそ^あ七^あは^あう^あう^あ一^あ耳^あの^あさ^あく^あよ^あ小^あ夢^あ

ゆ^あく^あ一^あか^あ花^あさん^あく^あト^あ胸^あと^あさ^あま^あり^あく^あ介^あ抱^あま^あれ^あば^あ分^あづ^あ死
眼^あと^あ見^あ合^あせ^あく^あと^あま^あく^あ涙^あ一^ああ^あん^あ不^ああ^ある^あさ^あが^あか^あ菊^あえ^あ
と^あ流^あら^あん^あれ^あい^あを^あ抱^あび^あま^あか^あく^あそ^あふ^ああ^あり^ある^あこれ^あこと^あも^あく^あも
余^あり^あむ^あど^あい^あ無^あ理^あな^あら^あう^あ幸^あ助^あさん^あの^あさ^あを^ああ^あく^あ業^あ平^あ
さ^ああ^あでも^あ源^あ氏^あの^あ君^あでも^ああ^ある^あそ^あよ^あえ^あく^ある^ああ^あ人^あが^ああ^あり^あま
せ^あう^あら^あた^あと^あえ^あけ^あ上^あか^あ菊^あさん^あと^あは^あ夫^あ婦^あよ^ああ^あり^あ抱^あた^あと^あ
ね^ある^あら^あま^あひ^あ覺^あ理^あふ^ある^あの^あま^あく^あも^あど^あふ^あを^あま^あく^あと^あ縁^あ成^あ
ま^あく^あば^あも^あど^あい^あた^あら^あま^あ一^あト^あ夢^あく^あは^あ七^あハ^あ娘^あ一^あと^あの^あ骨^あ牙^あ

小どおのち花が一言「王ウくみんるかれがうらうら
 サアく、嫉嫌を車一るヨウ泣きさえるト涙をあた
 やる「それでもあんなことをあつーやらのを「王ウウ
 ねへうら薬でも呑む「それでもさあよのりまたのど
 「王ウくらのねはあんなことをさのいよも今よりけく
 惚てるる身トやアをちと心がつりらうと案ト
 る「七七云々とあめくがそ人の心さうとあちの程又
 神うけく他の娘の綿繪も由え帰ることはいたなり

不どよサアまかんを直して奥へ来るとまをさうあつ
 お花の忽ちつとりと涙の笑顔振袖も露の情
 由たづなり「由べのあといらむくたらの「ごよで成
 ばんまきうらうそ苦勞ぐるりません「まんのらゝ
 神由一度の程の程さうりさあといめよあつさう入る
 るけアア極りが付ね早く子でも出来さ方が此
 方の嬢一夫でもよも恥くト顔をかくせー
 かのあつ「さあ七の終ちよひ美理の世間ゆらうぬ

さし成の思案以外の道迷ひ女やふれ用心あざ成
おけん 是見やても美女と美男のわづらう色の苦勞
よけい の余計ゆく身と強つ愁ひありこれを思へが不
男もまご一生の安樂あらんとあるに不接がまけ
と一とあらん歎

公羽州二の巻了

重陽 嘉言 應喜名久舎 三の巻



江戸 狂訓亭主人補綴

第五回

お夜活おれも程きだく物あつらるる長局に
秋の下旬お菊ハ淋しく我れ又森そくれうた
一人千草の落ふ月の影のありのまる越くやま
末どはくくと心細立日よ鐘ハ建長寺の牛の附
コヤモウハツとそふる乳母や何うのよく寐られる山

志い卜獨言床へ入らんいとつとことまる所へ中老岩浪ちゆうらうらゐるまひたす
 おお菊きくが幼へ音信おとづれく岩フヤクまかよるせりエトひ
 こそい岩波いんらみ今宵こよひハお夜結よづめるま
岩一い上番かみでいおけれんとも先達まへだちていのお返事へんじと今
 宵よひせいくあらうりとちり上ねへ私わたくしもいたまふ公小陸こりのま
 由ゆ無理むりよ色よい成返なりかへ答こたへといひつ出い玉たま章あきらの當
 家のけ若敷わかし縁ゆかり之助のすけとのお菊きくがいれを公こう上かみ姫ひめ君きみの
お為ためのあ兄あに君きみゆくいつやうよりお菊きくの色香かよ公とは

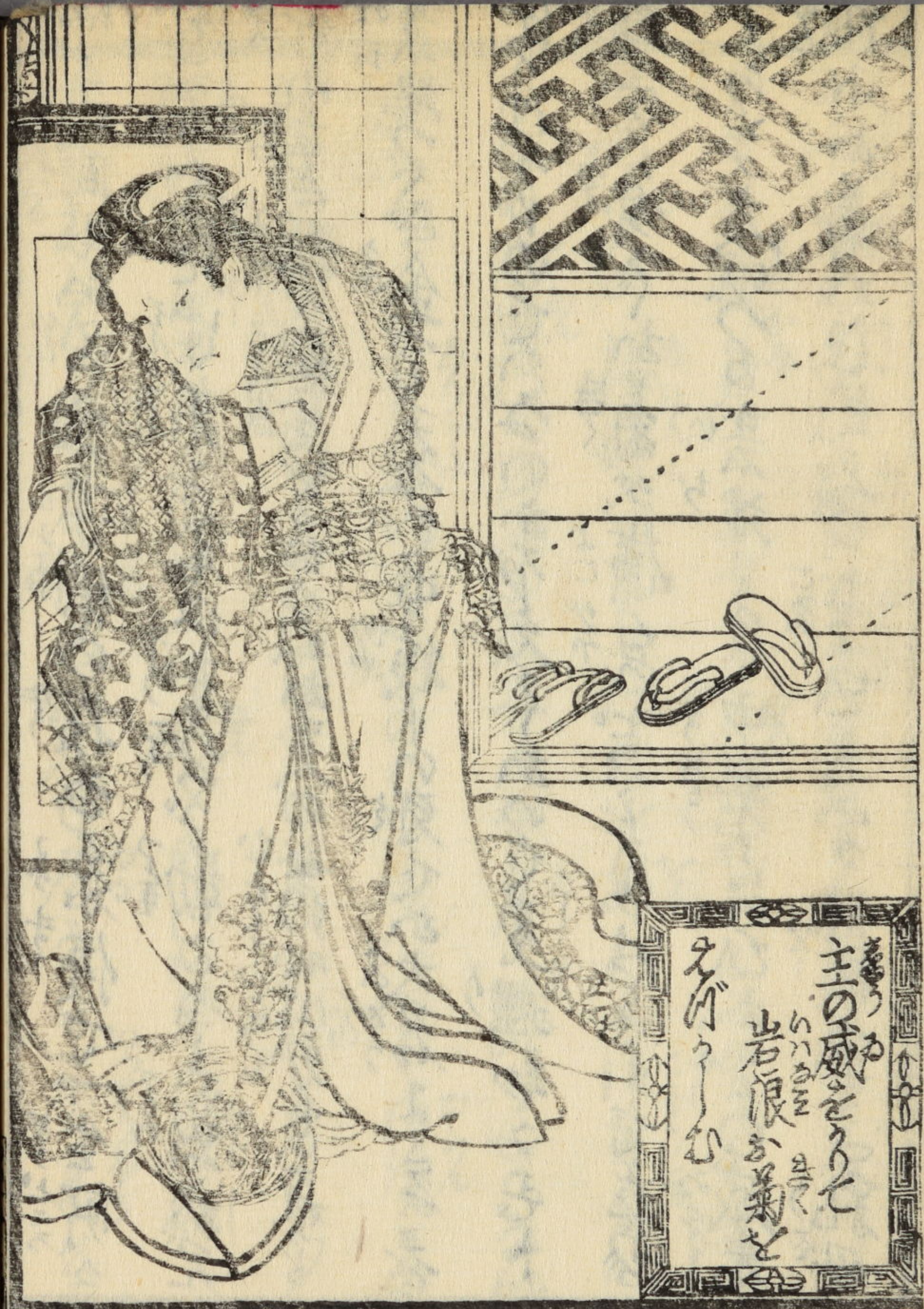
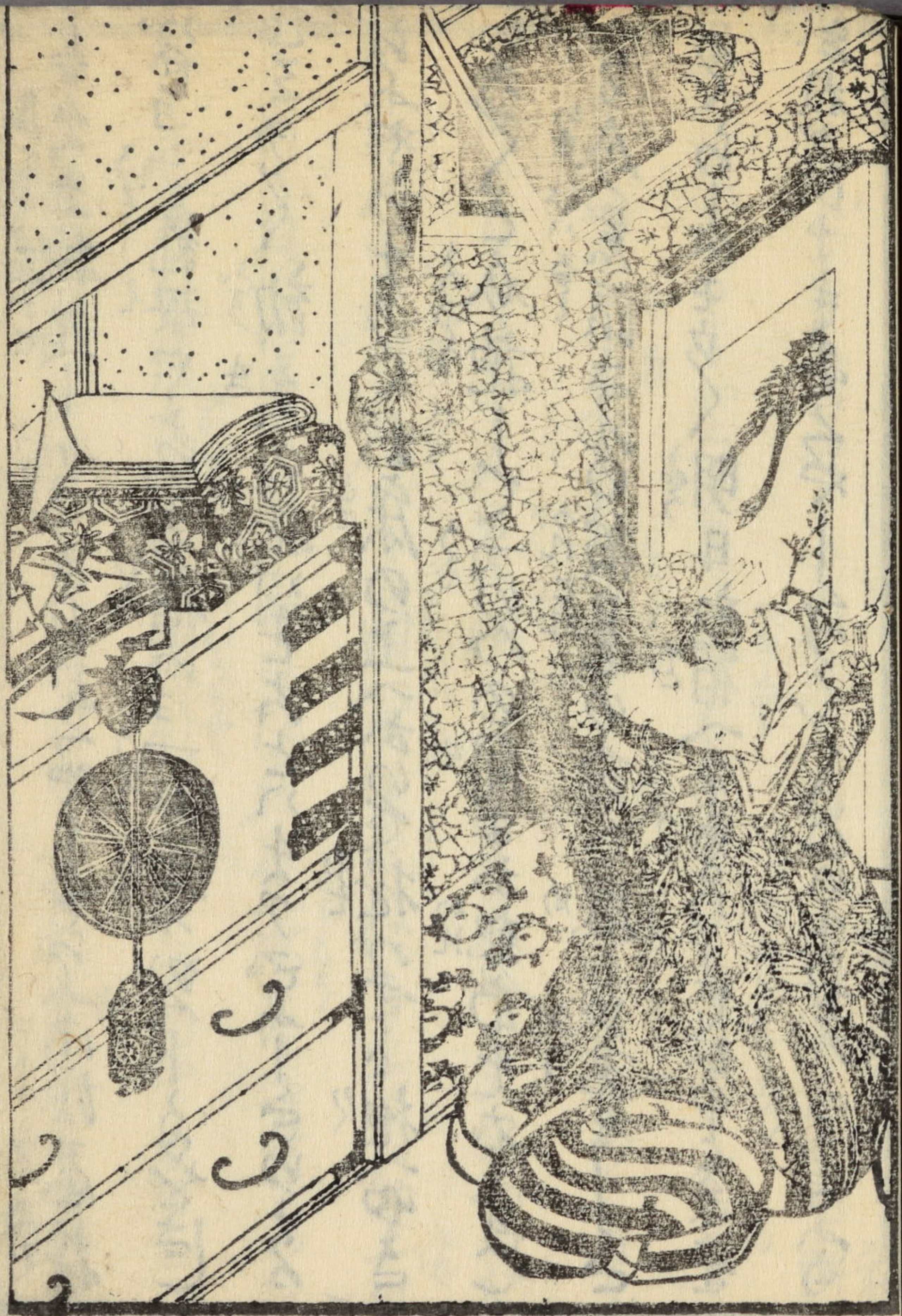
よらせられ中老岩浪ちゆうらうらゐるまをいつく日ひ々々小絶せんとく出いとおくられ
 一いつもいつもお菊きくのいれをうるさく思おもひ一度どのいへん
 一いつも上かみだその公こう清きよ廉れんゆくつが身み有う徳とくよいれ一
 由ゆ系けい系けい尽つりあらねどもいつけあまとあるあととる
 その日ひ々々一いの下した々々でもき清きよさの人ひと々々の恥とおろろを
 身みよまとい不ふ茂さの出世しよ小絶せんとく若わくどけらうまのを笑わら
 のい身み町ちやう家かよいれてもお親おやの新あく今け日ひまでハあま
 不足ふそくくあるのをその両親りやうしんの恥とあるま女めを公

あまをへ死うと思ひ結あくはらひ死あよき娘むすめの鑑かたとらひて
 一あたえり度あ作あられまあても此こゝととあむりあらあまあを
 一あかりやうあ一あハあイあ恐あれあ多あいあがあ急あ度あおあ路ありあ中あ上あまあ下あ
あ通あれあゆあもあいあひあさあるあゆあるあ山あ石あ浪あハあ敷あ色あのありあ一あモあおあ菊あ
 どのトあ白あ眼あはあけあ彼あ多あとあおあ菊あがあああのあのあああ當あてあ自あ
 をあ上あさせあ一あドあレあ志あをあくあ顔あとあかあえあせあ成あ程あ能あ活あ器あ
あ量あどあかあうあつあくあしあんあたありあうあ親あ成あさんあがあ金あ拵あ也あ日あ毎あと
あのあ宿あのあ使あ傍あ輩あ衆あへあんあ足あ舞あのあ何あ不あ足あをあ皆あ

さんかおまあへあとあむあのあさあふあるあゆあるあゆあるあ下あ世あ活あまあすあはあけあ上あり
 傍あ長あ志あきあるあこあおあまあへあのあ片あ素あ地あコあレあよあくあおあまあよあ若あとあああまあ
あまあかあ大あ名あ成あるあをあまあひあがあ用あとああありあくあ作あ製あさあるあくあ一あ時あのあ
あ美人あのあ山あ由あ一あ日あはあ築あ上あせあうあとあ成あ意あ以あ才あ合あがあやあまあ程あ
ああれあばあとあてあ虫あ回あ糸あのあ妻あ不あ町あ人あ成あ例あをあひあとあ成あ意あがああありあ
あさあうあ年あ房あ不あとあるあ考ありあ尾あとああありあくあおあ精あやあスあがあ身あのあ冥あ
あ加あトあのあらあれあてあおあ菊あハあ膝あのあうあ入あ涙あのあ玉あのあをあらあくあ一あラあやあく
あおあ泣ありあ何あがあ悲あしあのあ上あ泣あてあよあけあアあアあアあアあ泣あのあど

お女使の道^ちの路^{みち}は百^{ひゃく}度^どもわりの御代系^{ごだいけい}程^{ほど}それ
よりも数^{かず}多くつとアが色^{いろ}でもまるやうまゑのん
でおまへの様^{さま}嫌^{きら}とごりほねを折^{やぶ}のも流^{なが}な公^{こう}か主^{しゅ}
さめの流^{なが}恩^{おん}とごの由^{よし}系^{けい}るん不^ふ年^{ねん}齡^{れい}かひうるんで
もちうと有^{あり}益^{やく}いとらふとをめんぐく流^{なが}浸^ひるる
らぬ身^みとけちうよとさげくのお教^{おし}えのしよく
深い^{ふかい}岩^{いわ}石^{いし}それをりやこの何^{なに}このとい身^みの程^{ほど}細^こくぬ
なちあふり姫^{ひめ}君^{きみ}程^{ほど}のお人^{おひと}で居^ゐるう一生^{いっせい}すまふと

このお女^{このおんな}使^しもか云^いぶが子^こ供^{ども}の程^{ほど}系^{けい}程^{ほど}で一生^{いっせい}所^{ところ}
きくくさた中^{ちゆう}年^{ねん}ごもねな公^{こう}が勤^{つと}まるる勤^{つと}かえ
仲^{なつ}小^こ直^{ちゆう}私^しが程^{ほど}美^みとありぬおまへの程^{ほど}心^{こころ}は方^{かた}由^{よし}これ
意^い地^ぢづと金^{かね}づつとるても後^{のち}の身^みでか大^{おほ}名^な名^なよとを
けられるのでいふのおびえくおいで美^み理^り知^ちうモト
お方^{かた}女^めごお菊^{きく}が横^{よこ}身^みヒツよりくうして立^たあか
とらう久^{ひさ}いづるま地^ぢも中^{ちゆう}老^{らう}といひあまの威^い光^{こう}
御^ご小^こお菊^{きく}のむせうの夢^{ゆめ}を上^{かみ}方^{かた}は惜^{おし}るまゝ乳^う母^ぼ



善う
主の威をうりて
山を浪おき
えがく心

お大出抱起しおんえんあそ言々さそおやしおんえんあそらゆ揺忍抱
谷うら「乳母やあが痛いそのヨうそ」お胸むねがびとおんえんあそまじ
こまヨうそくあそ初はつ柔まの抱あそびあそまあそとあそハあそまあそアあそぶあそらあそよあそら
らあそやあそらあそまあそアあそくあそお床ここの上あそへあそおあそ抱あそびあそせあそトあそ抱あそへあそやあそ
いあそろあそくあそとあそお抱あそしてあそ「いあそろあその間あそはあそおあそ起あそああそそあそなあそしあそ
らあそ今いまお源いまるさんあその彼かれ是これのあそゆあそのあそで眼めがあそ覚さえあそきあそしあそと
ああそくらあそいあそんあそモあそウあそくあそ明日あすお宿まどへあそ申まをらあそしあそてあそおあそりあそとあそまあそをあそ
おねあそぐあそひあそすあそまあそまあそせあそらあそやあそしあそろあそくあそらあそりあそまあそせあそんあそトあそまあそいあそも

こあそアあそがあそらあそらあそいあそのあそらあそらあそああそくあそこあそらあそるあそヨあそ宿まどへあそ下あそりあそてあそもあそ從あそ
おづあそらあそいあそらあそらあそやあそらあそをあそりあそ姫ひめ君きみさあそらあそへあそ床ここをあそ申まをしてあそ居あそよあそ
若わそあそれあそもあそ出い来きまあそまあそ六む斎さい助すけはあそ親おやであそ尼あま寺でうらへあそ申まをらあそしあそてあそ
お床ここのあそりあそああそらあそらあそいあそのあそ差さ悟ごしてあそおあそまあそらあそ今いま又また思おもふあそとあそお
かあそさんあそのあそ死し亡じ抱あそびあそ「一ひと所ところはあそ死しねあそばあそよあそらあそらあそねあそ上あそけ
しあそめあそらあそねあそ入いれあそとあそをあそああそらあそしあそやあそらあそたあそとあそ豊とよ次つぎ弟あそさあそらあそがあそああそれ
ばあそとあそそあそああそらあそいあそらあそ大おほ切きるあそお物もの惣そう然ぜん然ぜんとあそそあそのあそ申まをらあそしあそてあそそあそのあそ申まをらあそしあそてあそらあそりあそまあそらあそのあそうあそけあそらあそしあそてあそそあそのあそ申まをらあそしあそてあそらあそりあそまあそらあそのあそよあそらあそいあそと

まきくろく 乳母やまきくろく けるあまご けれど先刻のものを
別て上くあられヨ 一ハハ 只今探ま 下持出たか
この至土産此香檀黒檀たがやさん唐木細工の
小文庫子そくりぬふ代紙細工切れをまつくさる
立一か恥くぬぬるれど虎子花子あそまてきま
ま一そふくと皆さんか代葉の耐り何あると死くる
らむくろくの宿へおあねをせとお預ひ中たふ
けれどごよ由私ハ死でもいさぬかうまむ村ごうくあても

あふ永いあといか預ひ中ふあともまぬあむらうそ懸し
そんトまふトあふくうむお菊が眼元一庵の女中のうみ
流木のひ渡子むせくう名跡のそぬいとまどひひまふ
ふあゆる跡よお菊ハ姫君より也あさあそも自由ま
らぬ大家の所格式内々あくと下され一頂物と成て
と思へいとあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも
もあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも
の返事はさうつきの病葉といひしゆが今入練の病と成

日増し年々るいぢうと傍でるさういふとされされと母の
お嬢ハこれ幸ひと死なうと夢の色ぬを押しこむあはぬ
表向医師よ業と立強き心そふそふしてそあををひ
鎌倉名うての悪修驗寂實院とひる山伏をたの
今と宿の邪法をさるせけれハ菊ハ次第小うさうゆ
質のふしぐのそこのいふ言ふ言ふのれぬる一ふ合もむ
まぬありさぬいともあやうい風情ありぬとも知るま信
ま清ハ子代幸助のちもふ加持紗縵ハいふまおとら

妙業名医まどつじ日獲摩の代業ハ百反と心せとい
ゆふ抱まれといさうある一由あはるこそ日夜小かとう中
またいふらびくたへふ方かて日敷と経やごま看病人由方
れそ夜休も今ハあきすだそ冬の夜中の夜もいさらぬ
子代幸助ハ見世の帳合をるそ終りと宵小持寐を
すけはゆるがあつて今宵もか菊が屏風の外にやあんと
清くそり木葉も移むる牛ハ附さるつれくとまくと居
睡る幸助耳元へきあつと一夢の酒の床ひらりあ

屏風の甲夜美をねのけてたれた下「お菊さんへ手紙を
たふふおのりよト」（お菊さんへ）「お菊さんへ手紙を
助さんどうも愛するねエ」（お菊さんへ）「ドレ」（お菊さんへ）「胸でもさませらよト」（お菊さんへ）
居るうち手紙がつくやうに乳母ハ湯蒸の業とてまゝ
「サアお業とて上れヨ」（お菊さんへ）「お業とてまゝ」（お菊さんへ）「アイルト」（お菊さんへ）
吾乳母やまを念佛とたんとやておれぬは連も終
るよかあるまのヨ幸助うエト身を志すとて「えん
の深切ありえん死んでも忘れません私が死んでら乳

母のあとでお乳ヤスよト「おれん乳母ハ泣出」（お菊さんへ）
やうく十六の花の宴のあまふか別れやたら私を
どういふしませうお生れあうか乳を上勿辨たぬが
産の子より大事よかりかかまふさる是程信公の「この
夜の眼も合ぬけ月日二七日の地立由あまこの内屋ま
草とつとむのふ務る神仏市利益のなんエとてよのよと
てまふませうかちのさの附りしとてお生ませとら
あられとか肝積のまゝるんお子とあつてよとてよけおふ

おみやがさわりのつたむのへぎやうへん小まのふあでころ
いと思ふるあう私おみやが死へお望まをねるく身みでもるけてあ
まのまのトるげは孝助ききとをけま「るんごまお乳母うた
どんおあまをころる糸きのよりの事を私とあめ人の精力せうりき
たうりても幸あんが後さ存ぞんまかくののり今日けふも大師だいしさあを
継ついで後ごをわけくのひまうへんでも糸きと丈夫ぢゆうぶあうく
おまんまじもあがれヨお菊きくさん「アイト返へん事ことも力ちからなく
孝助ききの自まごと抱かかりく、あめりう糸いとのまうあるまをば

「コレか見みあるふやせまはめあうて生なれまをのりト
ゆうち乳母うたハ弱よとあうへんは次ついでへう「まくもまのへん
まのりまは「えんゆのりあけれと私わたしが死しんでるう此因このゆゑよ
みんるあやる出で附つがあううそふして乳母うたあ「生なつて
「う生なて居ゐると思おもはるて陽ひん居ゐるさあそあうへんやあめ
さんや私わたしのぞいとお吊たらせでうへんまうへんそとあま
あめあ世よ後ごあるう何なにもあの上うへへえけれと女子むすめのもの
あめひでも控まかりかあまううこれあうのぞい

おかめ
 思ふてくさるまきト糸ふ附たり珊瑚樹の珠と
 娘君さるもより頂一初音とのふたる香を御紙のまき
 こころに寸をりの大きサふまされ千もの金前給世
 加羅刹其こころにこれハ娘君さるの祖父君の先代
 の大敵さるるなるまきまき拵がくま細きまきれ千もの
 撰振ハ昔の路川とすの軍は時流系が御願の馬
 のころふ附と古風の形をお替拵と拵とサ何ゆも
 あるまのれとさるひあぶくう上るヨ一まアくをんるまのりあつ

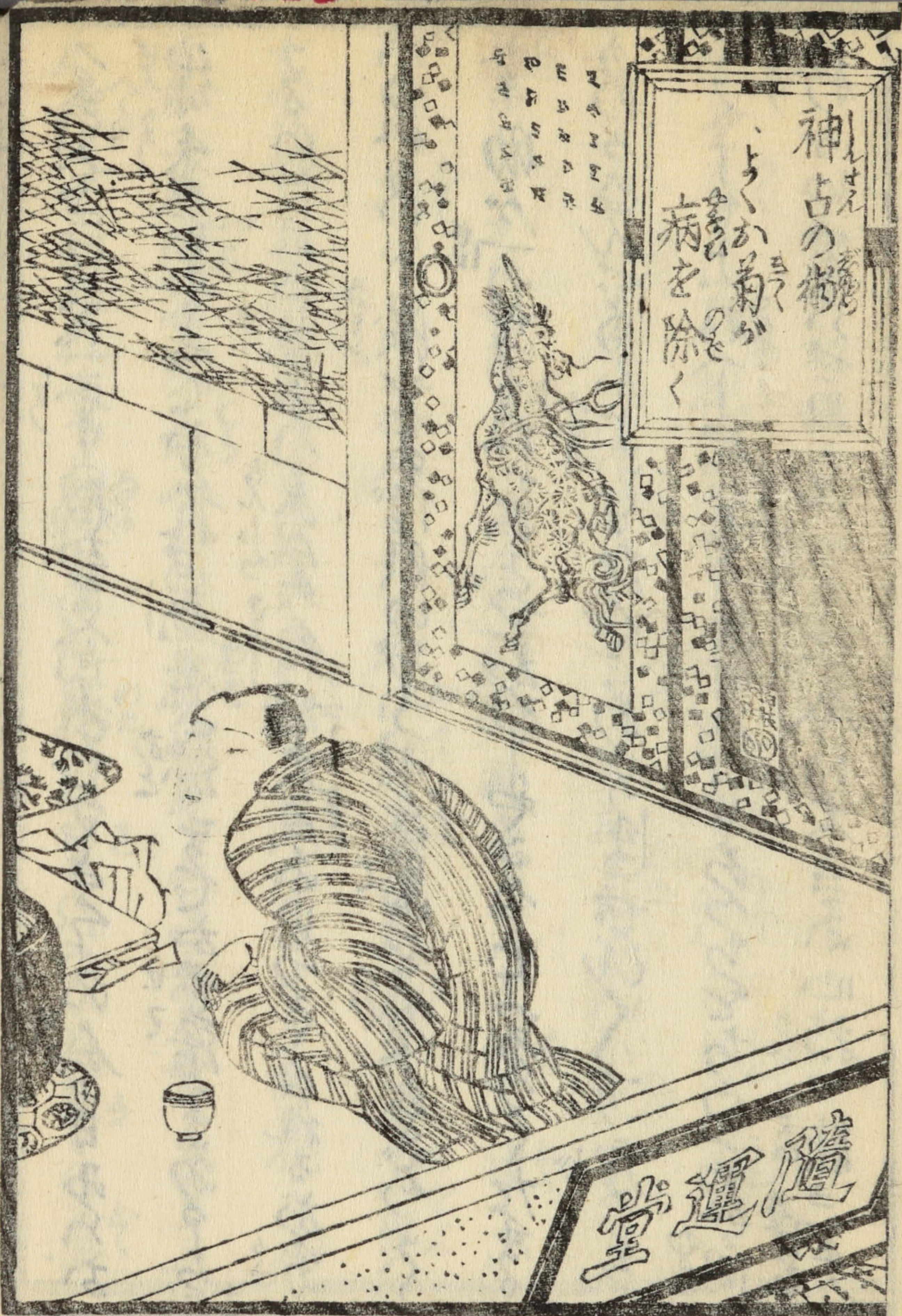
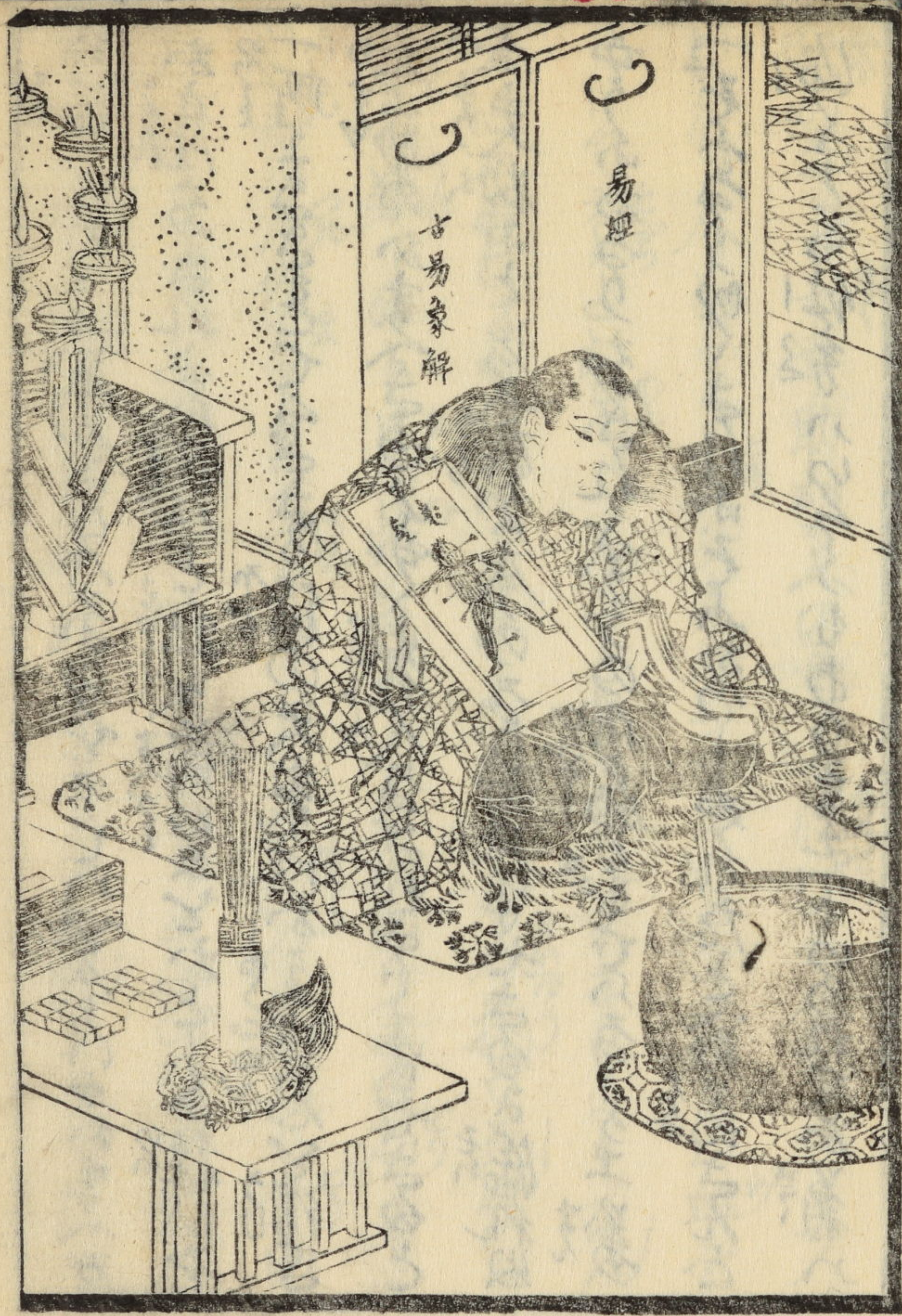
志ざりむとまやくれ全快さるまきその時あつれつと
 の好まののむお糸ごりや油にト泣ぬ白くそをくひ
 ぞくくこのころあつて死ぬのぞハあまのませんト
 ハいと公めりのや今ハの一言とるりのやせんとま
 やる樹やまきくぬあつとぞり



第六回

涙をそそげ今抱ふ心切なり一お菊の顔も白紙の中せ
かたさ区一アノ子は芥川出店のお花さんおよそ死なう
届けくおくれお兄さんお母さんお花さんと涙い申す
おろり抱りこといふとたえぬ勲賞のお身でもお実
のお兄さんと思ひまゐる私か死すさうお花さん
と二人連てお寺へおいで抱びてくさるやうおよふ
く傳へておくれモウ何ものひ跡の事あるお母の毒

るまどとせけれと幸助おまゝおのそくこの今の今日あのお
線香もよもよとておられヨ死えと涙をでお世落よあるら
るいけれと他お実私と大のおおつとられるお方
るおのト涙とおぼれいづらうと毒を喰食おあう
幸助が一つおねへおとせあうやるるそよあうくたまる
あうるんでもお葉をたんとあがりほせひく一子度ち
よくして上げ下やアアアアアアアアアアアアアアアア
袷がけいせぬせぬとエエエエエエエエエエエエエエエ夫



の娘うらのイヤカんふとんふるをりて六つ一のがおまへが
お産うまれあされお収とまびと私こころが前髪まへがみとかと一ひと親おやひを
一ひと所ところよりさしてさるかど徳とくの大事だいじにかまぬ恩おんと徳とく
血筋ちすぢのかまへさるかど人ひとをさしてさるかど七しちさぬと
心こころまぬと思おもふ死しふ今いまのさり由よし死し守まも七しちさるかど流ながれぬ
中なかふあるりあされさるかどの流ながれ守まも七しちさるかどう上うへあ
一ひとそふさるかどゆくさるかどふそふある一ひとやれたとへお死しさんと
流ながくともは方かたハはららくもあつまをとりつれてお菊きくハ

終すまわらう一ひと幸助さいすけおまへの中なかふ深あは切せきる人ひとのまこと三人
のまのヨ今いまも中なか々々通とほりと下くだめううは七しちさぬと血ちを
つけて育そだつお兄あにさんとおのりてさるかどううそん
あ心こころのまご一ひともなぬヨつと一ひとおまへの介かひ抱かかりて死しぬのが
辣まふ娘むすめのトと見み悟ごきめ一ひとそのあつさるかどおらう
乳母うははハ次つぎのまより一ひとヤやレレくくよくお物ものをさるかどれて幸助さいすけ
さんおらうぐさびれま一ひとナなニにサさくくびれのあせせん
ドレどレレアあが物ものとどりまらううトとお物ものをさるかどるたべ

さるる弱由其病と思ひてや心よく食一けまじら
コヤよくおより抱ぐごまどこれらう望つぐらく
せあくは位ぐもあるとよいなエ一そよサ護麻乃
おうげでたんくようらふコ、完夜がぬるそよごト屏風
の外そよのかコかく女中衆風を引せひく一せかんくコヤ居かね待む
でとの一こそよご一おねむり所ところの夜があけるお菊
さん由夕ゆふ邊のまどかたらよのそよご今いまさうくある
中なかまどくろくろ静しずかよあるト次つぎのまへ出いてその身みのかたふ

初はつ若わかづらく休息きゅうしあけるがほくぐ思おもふお菊きくは病やまひ
合あ合あの初はつぬことこともあれがその病やま症しやうをよくだし
控か方かたもあるべしと公こうを配くわいるこのトせう此こ時とき前まへ京きやう都とより鎌倉かまくら
下したり天文曆てんぶんりき学がく親相しんじやうの指さし南なん易い術じゆつと不ふどとん名な人じん
お去来宅きやうらいたく賀がとり入いるの枕まくら々めがめ目め谷が子こ旅りよ宿しゆくのよよ城じやう
写しやて望ぼうるふ目録めいろくとく一いつ之これ宅たく笑わら先せん生せいの身みはゆき
お菊きくが病やまを親しんおふせられんねがとを預ねがひお急いそ一いつ志し
おろくお菊きくえあされかたトたひひ並ならその身みの水みづをあびつ机え

の元小座を止め定小入つく筮竹を取やあつく坐
をうけ眉をひそめ一これハモシ宅 大率の易で山風虫益と
中ス卦で門内有賊之象石上栽蓮之意蓮 蓮子
筮の卦でどぶるテあり一変爻がまど一もどりふが
どぶるトまどまどぶるく目とどぶるのハアこれハ人小の
まるとのトや今一七日たてふ命があやういサテく仕合の
人トやよくの ねをゆくとをせるまど一は病人の居
所をまどく死うえて年齢二十八九才まどりの女も

目上の人トやまど人の方より来る守り或ハお札の取ま
しと例へあまむとる取隠しと朝ままよけ方へ持ち
素なされそれまどふけ方でも大法を修しと命を
いたれくうさまふお心なるまど一へいくそれハ殊ま
仕合よとんとまどまどさまうるまどまど朝一りその床
を改めるまどトりれて胸まどろつとゆふうむ幸助
かあふ似よりの後家のあやしと花がどく
米町の象路とゆりて乳母まどたんくのまどまど

をるせば乳母のさまがよ身の毛たちも床をとり
くえくか様が方よりうやくく病氣平愈乃
彩とくよとせし守と幸助子渡せばこれを五隠
一夜と千夜の思ひあぐぬるや依々目谷宅
架の方へ走りければ彼先生の後とひらき山府君
の思法を約ひ念ひ然し終りく幸助の対面
これのお早いよりあそく申記でござらふど昨日
守と申持来りへんくト懐中より八重封トせし

守と申し先生素渡しければ去来は口ふ秘文と唱
へ彼守と下に重封トと切て幸助のあまさ
出しこれとれヨ年月日時の延生ふ性まを
せし此雛形四十に本の針とさく丹絨るたる
邪法の彩も邪神の呪と有てこれかあぐ
ひる形より血のあそるあそるしサトのりて
幸助あそ出しあそるのあそるりしがあれ程
まてとるぞんしませむあるえあそるびうく

と一日数か満れば忽寂滅一あるこのおかげ
で別条あり助りすまれば殊不仕合一イやく
由りといふ所れる終このうへハ朝夕の念事とは
ゆ湯水の中も心をつけ毒味の用心まづは身を
商人の枕りとよ休へ蓋このおれとが半寅の芳
ふあつくり張あわよく穢ぬやうふ心をつけ相る
らふるうおひ暮が毎夜子の刻るそ後たん
せしと全夜と一心ふ約らるべしまづく退く

その元の身のうへまも由はまびつりふとて
せる事ありトいと念以るをといえと法ゆる道
何やや忠義心ふとらあつりあさまり難し凡
夫の情やうく家ふ立入りそその夜お伽
おろし乳母へおそく物溜かふるもつづくの
とろく歎息しとくをのけける

これより後編全三冊あぐめをたく
あさまるその一條宛早彫刻お探せ

ハ引續て為月の中亦發行仕

公羽艸三の卷ス

江戸作者 狂訓亭為永春水補綴

江戸画工 柳炯樓歌川國直模寫

應喜名久舎後編三卷 出来

